

配を樹立した白人に他ならなかつた。半島の不幸は白人の野望に起因してゐる。即ち英・佛等は此等の地域を黄金と技術の力に依つて自國への食料品、原料品供給地、又自國の工業生産品需要の市場たる植民地、搾取の對象地たらしめ、又南洋諸島、支那果ては日本進攻の據點たらしめたのである。げに此の半島こそは世界の寶庫が圍む所謂「環亞」地中海への門戸をなし、印度支那の領有なくしては大陸工作は不可能だつたのである。農業耕作や栽培に、鑛産資源の開發に、交通の現實に、或は住民の狀態に如何に多くの歪曲面が形成されてゐる事か。誠に亞細亞あつての歐羅巴であり、歐羅巴の繁榮は踏みしだかれた亞細亞を基盤としてゐたのである。此等の歪曲を全面的に剔抉し、權力的な領有關係から印度支那を本來の面目に復歸せしめる事こそ、我等地政學者のそして日本人の任務であり、然かする事こそ曾つて此の地に華々しい活躍を遂げた我等の祖先の遺業に答へる事ではなからうか。況んや久しい白人の抑壓に苦しめられ、歪められ乍らも、此の半島諸國の貿易はその植民地性を裏切つて亞細亞殊に日本と深くも結ぶ所があり、その經濟的開發が白人の支配機構の下では一定の限界を定められ、その高度の開發は専ら亞細亞特に日本の手を俟たずしては開發し得られないにおやである。印度支那半島と日本との結合は、此の半島の持つ地域的發展の必然的過程であり、此所に我が南進政策が歴史地理の必然たる基礎があるのである。印度支那が新しい秩序に定められ得るか否かは、ただわれ／＼自身にかかつてゐる。

本書は此等の點を自然的基礎、住民の構成、歴史的背景、資源と經濟、列強の壓入と民族の反響、なる五章に分つて解説書的な形式の中に詳細に指示してくれ、此所に本書が、南方圈を單に現實を表面的にのみ把握し、或は重要資源地としてのみ理解し、甚だしきは單なる旅行記にすぎないと思はれる數多の類書を鋭くも抜いて高く光彩を放つてゐる所以がある。衷心より廣く江湖の人士に三讀を薦める次第である。本書が文部省推薦圖書に選ばれたのも誠に當然の事であり、本書に對する一の讃辭にすぎない。

(昭和十六年十一月、白揚社發行、定價金二圓)(岡本記)

龍門石窟の研究(東方文化研究所)

研究報告
第十六冊

水野清一・長廣敏雄著

早く明治三十五年、洛陽伊闕を訪れて諸洞を紹介せられた伊東博士の業績以來、我々には既に親しいものとなり來つて居り、又東亞の魅力として世界に讃歎せられてゐる龍門の藝術は、それ自身又研究の歴史を重ねて來た。然し我々は未だこの龍門各洞について、單に之を事實的に知るのみならず、更に立入つて深く内容的にも検討した點に専門的研究として稱するに足る業績を持つて居たとは言ひ難い。然るに昭和十一年、北支に美術の探索旅行を試みた著者等は、既に十二年その業績の一半を「寧夏山石窟」として公けにされたが、今また、その龍門に關する根本的研究を發表して此の缺を満することゝなつた。

そもそも、この龍門研究の事は、故濱田耕作先生の指導のもとに業を始められたものであつたが、十三年先生がお歿くなりになつた爲め、本書は悲しくも故先生の爲めにさへげられ、先生が行を共にして洛陽伊闕を訪はれた小川琢治先生が代つて序文をよせられてゐる。本文一四〇頁、附録研究一〇二頁、石刻錄二〇七頁、異字表二九頁、圖版一〇三頁、拓影二八頁、四六、四倍のこの豪華版は戦時下に於ける學的事業として眞に内外に誇るに足るものがある。

さて本文「龍門石窟の研究」は序説及び三つの編よりなつてゐる。先づ序説は龍門漫見の頓末より説き起して爾後に於ける我國、及び歐米諸學者の研究業績をあげ、一方又支那學者の石刻拓影に主力を注いだ研究成果を述べて龍門研究史をなし、先人業績の概況をあげて本書の立場を明かにすると共に參考とすべき資料に及んでゐる。

本文第一篇第二篇は同石窟各洞をば西山・東山に分けて順次述べてゐる、蓋し本調査は時日の關係上、第十四洞、魏字洞、藥方洞、蓮華洞、賓陽洞、古陽洞等の北魏諸窟に主力が注がれて居るが、更に又從來の諸研究の業績を縱横に檢討して各洞に及んだものであつて諸窟の造構に、諸佛の像様に、表飾の細部に、各洞掘鑿年次の考察に精彩に、豐饒な記述に満ちて居る。而してその考證についても眞重な科學的態度を持して、一躍カンダーラを云ひ、グプタを論ずる如き飛躍を避け先づ支那佛教美術史に於いて龍門各洞が占むべき位置を見極はむる事に主力をそそぎ、燦煌

や雲崗、響堂山や犍櫓等と廣く對比考證するところ、本書が龍門の研究書たると共に、優に支那佛教美術史をなして居る事に著しい特色がある。殊に注目すべきは本文各頁に細字組みで設けられた註の欄であつて、こゝには東西諸學者の先考諸説についてその見るべきものや異説をあげ、併せてその批判を試みるなど極めて嚴密に、本書をして舊來諸研究、諸業績の金字塔たり、オーソドックスたるの感を深からしめる。なほ又本文中には著者等の調査による實測や寫眞を材料とした整細な實測圖があり、例へば賓陽洞床面浮彫文様圖や天井裝飾文様圖等、他に見られぬ貴重な資料があつて寫眞資料がとかく部分的、斷片的になり易い缺を補ひ、北魏窟院藝術のはなやかさをそのまゝに全的構成に於いて把握させられる喜びは格別である事を述べて置きたい。

第三篇は龍門石窟の總論であつて六章に分れ第一章には諸洞開鑿の經過を總括し從來問題となつてゐる皇帝の爲めの石窟三所を論じ、第二章以下に於いては、各洞の構造・佛範の制・天井を始めとする裝飾文様・尊像形式の各項についてその變遷を論じ、第六章はそれらの結論として同じく北魏の藝術とは言ひ乍ら雲崗のそれが極めて線の太い單純な西方雜多な様式を平氣で取入れた門口の廣い豪快さを持つて居たのに對し、龍門の藝術は全く抽象的な内省的な方向を取り、透彫風の線刻の纖麗な線の抑揚とリズムがこゝでは驚嘆すべき天地を展開して居て、それはまさしく漢以來の抽象的な線の藝術が新來の藝術を全く消化してしまつた所に生れたと言ふ事が出來ると論じてゐる。

以上の本文の外本書には附録第一として塚本善隆氏の「龍門石窟に現れたる北魏佛教」の研究篇を加へて、その價值をいよく重からしめてゐる。

本篇は序説と本論八章とよりなり前項本文はもとより、次の附録第二「龍門石刻録」と一體をなすものであつて、これらの資料にもとづき龍門石窟に現れたる北魏佛教の教義並びに信仰の歴史的性格を論ぜられたものである。

先づ序説には西紀第五世紀より第八世紀にわたる支那佛教の最も活氣ある成長期から最も華麗な成熟期を負うて出現した雲崗、龍文石窟群の重要性を説き、殊に龍門に多くとめられた石刻が支那文化史、殊にその佛教史の研究上如何に貴重であるかを述べ、併せて龍門造像の盛衰と尊像の變化を説いて單に統計的に之を大観しても信仰そのものの變化が明らかにそこに見取られる如く諸洞の造像これ又石刻に劣らず頗る貴重なる資料である事を示されてゐる。(以上序説第三章)

さて本論は、先づ第四章に「北魏洛陽佛教の盛衰と龍門」について論じ、洛陽遷都の一大英斷を敢行した孝文帝の事業と、それに伴つて現出した龍門開鑿事業の事情、及び意義について説き起し順次、世宗・肅宗朝を経て魏末に至る世情の變遷とそれに表裏する龍門經營の次第を論じ、第五章には「北魏窟に現れた佛教」を考察して、龍門北魏窟の代表的二窟たる古陽洞と賓陽洞とを論じ、共にそれらが大乘佛教を高揚するものであつて、絶えず漢譯諸經典の統一組織化に精進しなければならなかつた支那佛教が、よう

やく小乗を棄揚し石窟して大乘佛教に統一して行つた北魏の信仰をそのまゝに傳へるものである事を述べる。次ぎの第六章は「佛教史料としての主要造像記」の考説であつて、之を貴族宗室關係のものと、信仰の指導者たる僧尼關係のもの、及び信仰集團にかゝるものとの三種に分つて述べ、第七章には「龍門造像に見る禮拜對象の變化」を論じて釋迦信仰より彌勒、更に彌陀の信仰へと遷つて行つた次第を考察し、それは又そのまゝに雲崗より龍門へ、更に北魏より唐への信仰思想の移り變りである事を述べ、北魏代は結局此土、的な佛菩薩の信仰であつたのに對し唐代は彼土、的であつた事を論ずる、第八章は以上諸論の結語であつて、こゝに「龍門北魏佛教の歴史的性格」が總括的に論ぜられ、結局雲崗が「印度の悉達太子が如何にして佛になつたか」の釋迦傳中心の佛教であつたのに對し、龍門北魏窟には「釋迦佛は何を説いたか」が示されて居り、更にその唐代のものには「支那の我々は如何にして救はれるか」と云ふ支那の國民佛教が表現せられて居り、そこに外來の印度佛教が支那佛教にまで發展して行つた有様がうかがはれる事を以て結んで居る。

以上紹介が甚だしく長くなつたが、要するに本項はそれが一個の立派な佛教史研究たることに於いて、それは附録と言ふよりも石刻録と共に本文の成果の上に立つものであり、一方又龍門の美術考古學的考究と云ふ事に觀點を置くならば、既にこの石窟造像の對象が宗教的内容をもつた著しく高次のものたる以上、深く思想内容に立入つたかゝる考説をまつて我々はそこに現出された美

が、その時その時の歴史の中に生長しつゝ、如何なる點を或は愛の理想を求めて作りなされたかを一層深く知る事が出来よう。

なほ附録第二の石刻録以下について述べべき事は多いが餘り冗漫になる故、今はそれらが古文書として稱すべき史料が殆んど傳はらぬ支那に於いて南北朝、隋唐の中央文化域に於ける宗教生活を見るべき一等史料として極めて貴重である事を述べ、一〇四七號に及ぶ刻銘判讀の苦心を謝して筆をおく事とする。(四六四倍、昭和十六年八月、座右寶刊行會發行、定價金四十圓)〔岡田芳三郎〕

上都

蒙古ドロンノールに於ける元代都址の調査

(東方考古學叢刊、乙種第二冊)

原 駒井 和田 淑人 著

本書一冊は、内蒙古ドロンノールの西北閃電河々畔にのこされた元の上都を、親しく考古學的に調査された、その報告書である。おもへば游牧の民、蒙古族はそのむかし、オノン、ケルレンの河域に興起し、亞歐大陸をその馬蹄に蹂躪したが、もともと都城といふやうなものをもたなかつた。しかし、増大する國力の象徴として、太宗即位の七年(西曆一二三五)はじめて國都、宮殿がいとなまれたのは外蒙古オルコン河畔のカラコルムであつた。ついで憲宗蒙哥の六年(西曆一二五六)弟忽必烈はこの閃電河畔の龍岡に己が居城をいとなみ、憲宗の崩後、こゝに即位し、しばしこのとこ

ろを國都としたが、至元四年(西曆一二六七年)いまの北京に、大帝國にふさはしい大都の經營をはじめてから、こゝを上都とした。上都は、その後も避暑の陪都として、なほ重要性をたもつてゐたが、元の末帝、順帝至正十八年(西曆一三五八)紅巾の賊に焚かれてからは、まもなく元は滅亡、ひきつゞく蒙古民族の不振で、その後この地に據るものなく荒涼なる原野にのこる廢都としてながい年月がながれたのである。

はるか蒙古高原の、荒涼たる砂丘や草原の間にいまはねむる廢都、そのむかし、マルコ・ポーロがうつくしくもかたる上都。それは歴史家の探求慾をそゝるに充分なものである。すでに一八七二年ブッシュェル(S. W. Bushell)の踏査があり、ついでポズドニエフ(A. Pozdniev) キャンベル(C. W. Campbell)の調査がありまた明治四十年には桑原隲藏博士、鳥居龍藏博士もこゝを訪ねられたが、近くは一九二五年にインペイ氏(L. Impey)の詳細なる調査があつた。だんだんくはしいことがわかつてきたが、決して調査の必要は減じなかつた、かへつて、ますます、その興味があふられ、その重要性が知られてきた。それは元代の遺蹟をそのまゝ、づぶにのこしてゐる土地として、また元一代の比較的純粹な標準遺蹟として、研究の上からもつよくマークせられたのである。

しかるに、昭和十二年六月、原田淑人博士を主班とし、駒井和愛、小林知生、赤堀英三、末水雅雄、島村孝三郎諸氏を隊員として、東亞考古學會の上都調査隊が編成され、北支の風雲急をつけつゝあるさなか、一意この遺蹟の究明に従事され、その後支那事